

# ヨルダン南部ジャフル盆地の遊牧化

—ハラアト・ジュハイラ2号遺跡の第6次補足調査(2019年)—

藤井 純夫 金沢大学国際文化資源学研究センター特任教授  
 足立 拓朗 金沢大学歴史言語文化学系教授  
 上杉 彰紀 金沢大学国際文化資源学研究センター特任准教授

## Pastoral Nomadization in the Jafr Basin, Southern Jordan: Complementary Excavations at Harrat Juhayra 2, 2019

FUJII, Sumio Project Professor, Center for Cultural Resource Studies, Kanazawa University  
 ADACHI, Takuro Professor, Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University  
 UESUGI, Akinori Project Associate Professor, Center for Cultural Resource Studies, Kanazawa University

藤井  
純夫  
ほか

### 1. はじめに

ハラアト・ジュハイラ2号遺跡(Harrat Juhayra 2)は、ジャフル盆地北西の玄武岩台地上に位置する銅石器時代の集落・墓域・聖域複合遺跡である。集落は台地南側斜面に沿って細長く展開し、墓域・聖域は台地頂上の平坦部に広がっている(図1)。調査は2016年の夏から開始し、最初の3回は墓域・聖域の発掘に集中した(藤井他2017, 2018; Fujii *et al.* forthcoming a-c; Fujii *et al.* in print a-b)。一方、線状集落の発掘は第4次調査から始まり、昨年度の第5次調査では東西両端部分の補足発掘を行った(藤井他2019)。今季もその作業を継続した。以下はその概要である。

### 2. 集落東端部分の追加調査

集落東端の小ワディを挟む緩斜面では、矩形住居遺構1件、円形集石遺構1件、小型ダム2基を、追加発掘した。東から順に紹介する。

HJH-265、-266号遺構(ハラアト・ジュハイラ2号遺跡第65、66号遺構の意、以下同様)は、小ワディ北岸緩斜面の下端部分を縁取る石列である。現状では決壊部分もあって断続的であるが、本来は互いに連結して全長約72mの貯留式灌漑ダムを構成していたと考えられる(図2)。層位的にも隣接のHJH-269号住居と一致するので、銅石器時代集落の灌漑耕作地を形成していた可能性が高い。後述するように、集落の西端

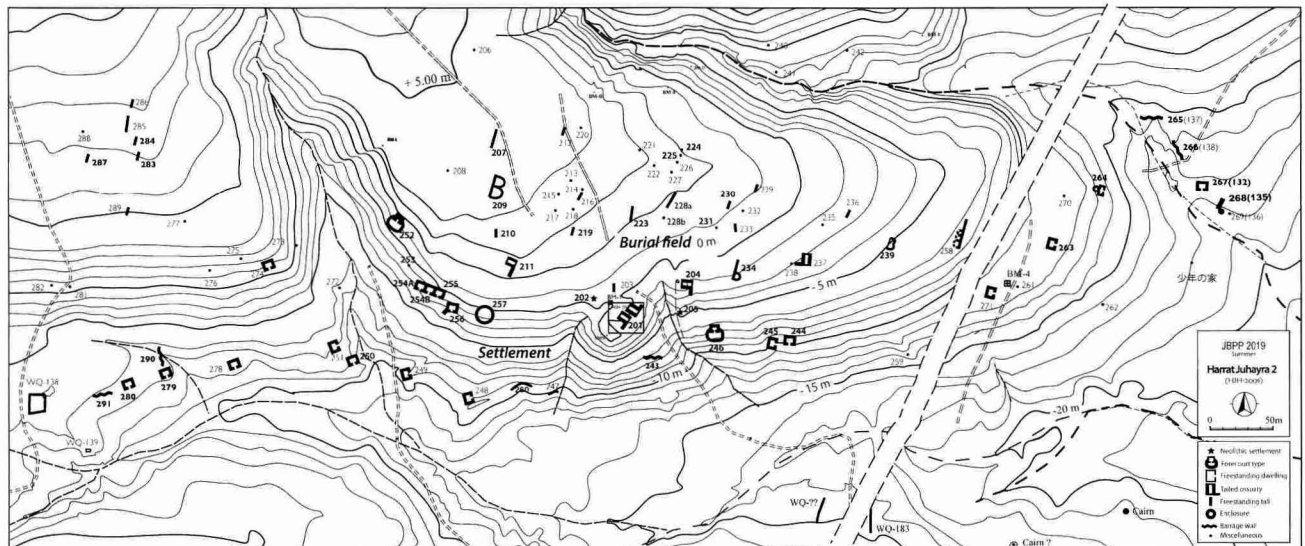


図1 ハラアト・ジュハイラ2号遺跡：遺構分布図

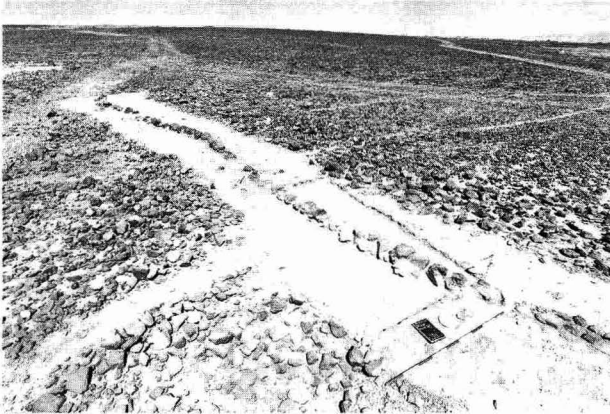


図2 哈拉特・ジュハイラ 266号貯留式ダム：全景  
(南東から)

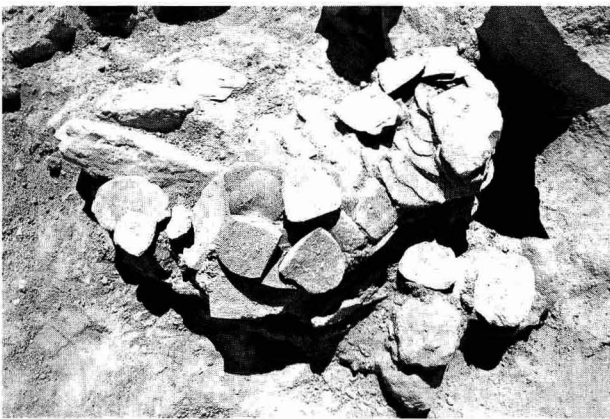


図4 哈拉特・ジュハイラ 263号住居：タビュラー・スクレイパーのキャッシュ

部分でも同様のダム群が確認されており、この種の簡易灌漑用ダムが多用されていたことが分かる。

HJH-270号遺構は直径約5m×高さ約0.4mの小型円形集石遺構で、マウンド中央直下に墓室らしき円形の石列を組み込んでいた。ただし、人骨や副葬品は出土しなかった。台地北半に集中する小型ケルン墓群の単独例と考えられる。層位的にも周囲の銅石器時代遺構より新しく、線状集落とは無関係である。

HJH-263号遺構は、銅石器時代のレヴァント南部に通有の、大型・棟入・矩形住居遺構(broadhouse、長辺11.3m×短辺5.1m)である(図3)。昨年度の調査で床面中央をトレンチ発掘していたので、本年度は左右の残り部分を追加発掘した。その結果、床面左右両端にそれぞれ2~3基の矩形区画(貯蔵スペース?)が伴っていること、左端部分にはこれ以外にも立石で囲まれた細長い小部屋列があること、が判明した。この小部屋列は後のテイル付き納骨堂(tailed ossuary)を想起させ、興味深い。遺物は意外に乏しく、石臼・擦石、ハンマー・ストーン、タビュラー・スクレイパー



図3 哈拉特・ジュハイラ 263号住居：全景(南南東から)

などが少数出土したのみである。なお、遺構の覆土中から、おそらくは前期青銅器時代のもと思われる大型・縦長のタビュラー・スクレイパー計72点が、キャッシュとして発見された(図4)。同様のキャッシュはこれまでの調査で複数確認されており、この遺跡一帯がジャフル盆地で量産された剪毛用石器の主要運搬路となっていたことが推測される(Fujii 2011)。キャッシュの傍では、煮炊き用の土器を入れた別のピットも確認された。

### 3. 集落西端部分の拡大調査

集落西端の河川敷では、数件の矩形住居を新たに確認した。その結果、この線状集落が昨年度調査の段階よりも西側に更に約200m延長していることが判明した。

HJH-250号遺構は、昨年度の調査でその中央部分をトレンチ発掘していた。今季は床面全体を拡大発掘したが、盗掘によるダメージが著しく、やや歪んだ遺構プランを確認したのみである。

HJH-279号遺構は、集落西端部分を代表する横長矩形住居遺構で、全体にやや小型(間口5.8m×奥行4.0m)であること、後壁のみが2列で側壁・前壁はやや貧弱な構造になっていること、そのため全体のプランが歪んでいること、などの特徴が認められた(図5)。集落東端から続く一連の横長矩形住居遺構としては、後期のタイプに属する。遺物は少なく、頸部に刺突文突帯を伴う粗製土器、小型のタビュラー・スクレイパー、石臼・擦り石などが、わずかに出土した。

HJH-280a号遺構も、後期型の横長矩形住居遺構である。この遺構では、洪水による側壁・前壁へのダメージと、その補修痕跡が認められた。注目すべきは、補修の最終手段として、楕円形プランの小型簡易住居

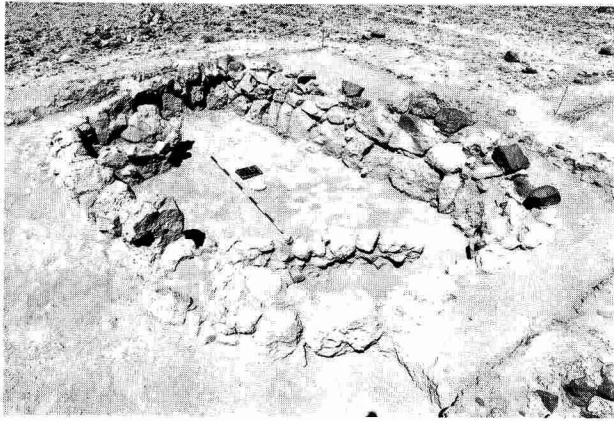


図5 ハラアト・ジュハイラ 279号住居：全景(南東から)



図6 ハラアト・ジュハイラ 280a/b号住居：全景(南東から)

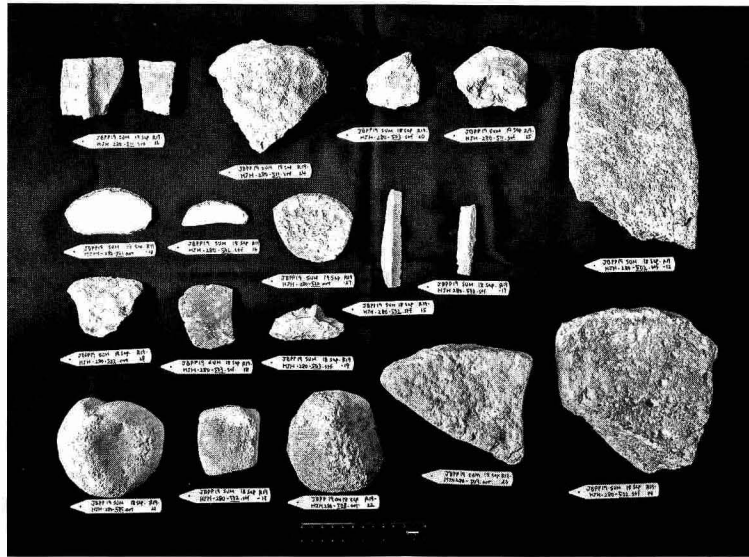


図7 ハラアト・ジュハイラ 280号住居：出土遺物(抜粋)

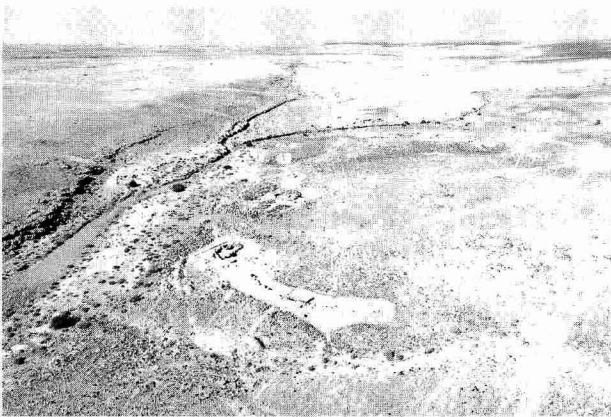


図8 ハラアト・ジュハイラ 290/291号貯留式ダム：全景(北東から)

(HJH-280b)を流失部分に造り足していることである(図6)。これは約1 kmにわたって営々と建築されてきた横長矩形住居遺構の伝統から大きく外れるものであり、集落生活自体の終焉を示唆している。事実、西に約200 m離れた孤立例を除けば、集落はこの段階

で廃絶されている。なお、遺物は279号住居と同様であった(図7)。

HJH-290、-291号遺構は一線分の長さが約5~20 mの断続的な密閉石列群であり、HJH-279、-280住居遺構とも連結して、ワディ横の緩斜面下端部分をU字状に囲っている(図8)。集落東端で確認したのと同様の、貯留式灌漑用のダムであろう。この種のダムには、地表流水を一旦堰き止めて地中に含浸させ、灌漑の一助とすると同時に、耕作土壌の流失を防ぐ役割があったと考えられる。なお、このダムの冠水面積は約1~2 haである。これは、ワディ・アブ・トレイハなどで確認されている先土器新石器時代ダムの冠水域と同レベルであり、銅石器時代になっても耕作地の基本単位がほとんど変化していないことを示唆している。

#### 4. その他の補足作業

上記以外に、住居列の中断している集落中央部の急





図9 ハラアト・ジュハイラ 243号散水式ダム：全景  
(南東から)

斜面で、前年度発掘した2基のダム(HJH-247、-260)と同様の小型散水式ダム1基(HJH-243)を発掘した(図9)。その結果、緩斜面では連結式の貯留式灌漑ダム、急斜面ではこの種の小型散水式ダムと、用途に応じて異種のダムを使い分けていたことが確認された。この他、台地の西側延長部分では、集落西端の住居群に対応すると思われる数基のテイル(tail)を確認した。その大半は、1ユニットのみの小型タイプであった(図10)。

## 5. まとめ

今季補足調査の最大の成果は、集落西端部分における後期型住居群の発見である。これによって、ハラアト・ジュハイラ2号遺跡線状集落の内部変遷が明らかになった。この集落は、1)東半に特徴的な大型の矩形横長住居に始まり、2)中央西寄り部分に多いプランの歪んだ事例を経て、3)集落西端で出現した小型かつ変形プランの住居に終わった、と考えられる。その最終形態となったのが、破損後の矩形住居に付け足した小型の楕円形住居(HJH-280b)である。重要なのは、こうした変化と並行して、住居の立地も台地斜面からワディ河岸へと下降していることである。この動向は、降水量の減少を反映しているのかも知れない。住居自体のサイズや構造も、河川敷に降りた段階で大きく縮小・退化している。遺物も、総じてこの順に乏しくなる。墓域もこうした変化に対応して、その西端部分では1ユニットの小型テイルに収斂している。これら一連の変化は、集落運営の不安定化とこれに続く遊牧化を示唆している。事実、台地西端部分に見られるマウンドを伴わない小型のテイルは、ジャフル盆地沙漠の内奥にまで広く拡散しており、この段階で遊牧化が進

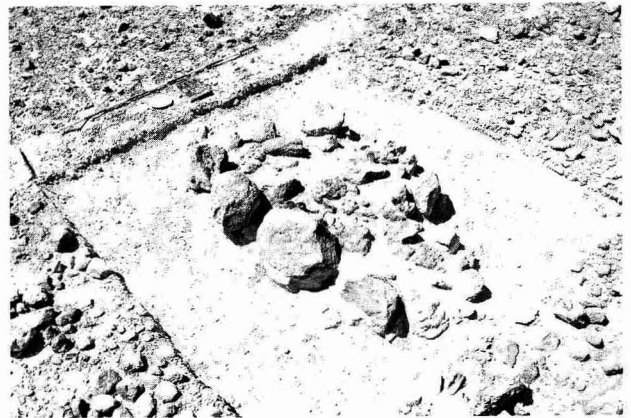


図10 ハラアト・ジュハイラ 284号小型テイル：全景  
(北東から)

展したことを裏付けている。

ハラアト・ジュハイラ2号遺跡銅器時代層の調査は、これでようやく一段落した。予定よりも一年遅れたが、次年度は201号遺構下に広がるPPNB前期集落の発掘を再開する予定である。

## 参考文献

- ・藤井純夫・足立拓朗(2019)「ヨルダン南部ジャフル盆地の遊牧化：ハラアト・ジュハイラ2号遺跡の第5次補足調査(2018年)」日本西アジア考古学会編『第26回西アジア発掘調査報告会報告集』29-32頁。日本西アジア考古学会。
- ・藤井純夫・足立拓朗・長屋慶憲(2018)「ヨルダン南部ジャフル盆地の遊牧化：ハラアト・ジュハイラ遺跡群の第3次・4次発掘調査(2017年)」日本西アジア考古学会編『第25回西アジア発掘調査報告会報告集』117-121頁。日本西アジア考古学会。
- ・藤井純夫・足立拓朗・長屋慶憲(2017)「ヨルダン南部ジャフル盆地の遊牧化：ハラアト・ジュハイラ遺跡群の第1次・2次発掘調査(2016年)」日本西アジア考古学会編『第24回西アジア発掘調査報告会報告集』132-135頁。日本西アジア考古学会。
- ・Fujii, S. (2011) 'Lost Property' at Wadi Qusayr 173: Evidence for the transportation of tabular scrapers in the Jafr Basin, southern Jordan. *Levant* 43/1: 1-14.
- ・Fujii, S., Adachi, T. and Nagaya, K. (forthcoming a) Harrat Juhayra 205 and 202: Excavations of a PPNB encampment and an EPPNB settlement in the Jafr Basin, southern Jordan. *ADAJ* (Annual of the Department of Antiquities of Jordan) 61.
- ・Fujii, S., Adachi, T. and Nagaya, K. (forthcoming b) Harrat Juhayra 1-3: Excavations of Chalcolithic tailed ossuaries in the Jafr Basin, southern Jordan. *ADAJ* 61.
- ・Fujii, S., Adachi, T. and Nagaya, K. (forthcoming c) Harrat Juhayra 202: Early PPNB flint assemblage in the Jafr Basin, southern Jordan. *Proceedings of the 8<sup>th</sup> International Conference on PPN Chipped and Ground Stone Industries of the Near East*. Nicosia: University of Cyprus.
- ・Fujii, S., Adachi, T. and Nagaya, K. (in print a) Harrat Juhayra 2: Excavations at a Chalcolithic settlement in the Jafr Basin, southern Jordan. *ADAJ* 62.
- ・Fujii, S., Adachi, T. and Nagaya, K. (in print b) Harrat Juhayra 1-3: Excavations at Chalcolithic burial fields in the Jafr Basin, southern Jordan. *ADAJ* 62.